



**MORIOKA**  
ROTARY CLUB WEEKLY

第25回例会(1月18日)  
平成25年1月25日発行

クラブ事務所 岩手県盛岡市菜園1丁目10 川徳デパート内  
TEL (651) 1111 (代)  
FAX (653) 5622  
例会場 同上  
例会日 毎週全曜日12時30分～

会長 藤村 文昭  
幹事 佐藤 重昭  
会報 福田 荘介  
クラブ直通電話 TEL (653) 5682

奉仕を通して平和を Peace Through Service..... R1会長 田中作次



ゲスト卓話

「被災地支援は息長く  
～宮古支局の経験から」

岩手日報社 事業第2部長  
小原 正明 様

●スピーカー紹介●

釜石生まれ、盛岡育ち、44歳、2児の父。盛岡一高から岩手大学に進み、平成5年岩手日報社入社。報道部、運動部、整理部のほか、花巻支局、東京支社、宮古支局長を経験。昨年10月から事業局事業第2部長。報道部では警察担当となり新聞記者として鍛えられ、県政・教育記者クラブ時代は教員の不祥事を相次いで記事にし県教委を厳しく追及。セクハラバスターズと呼ばれた。東京支社では政治取材よりもJリーグやプロ野球取材に没頭、運動部では北京五輪の特派員、サッカー盛岡商業の全国制覇、菊池雄星の甲子園取材 10試合など。東日本大震災の直後に宮古支局長として被災地を精力的に取材してきた。(阿部広会員)

変わらぬ被災地の表情

ただ今ご紹介いただきました岩手日報の小原です。昨年10月から事業第2部長という役職をいただいておりますが、それまでは記者として沿岸の宮古支局長を1年半務めさせていただきました。本日は皆さまの貴重なお時間をいただきましたので、被災地での経験をお話して、復興を考えたいと思います。

まずは、被災地の最近の状況ですが、おととの16日、1か月ぶりに宮古市に行ってきました。その2日ほど前に20センチの降雪があったため、珍しく街が雪に覆われていました。沿岸地域で生活したことのある方はご存知かと思いますが、太平洋岸は冬場、とにかく晴れて日照時間が長い。私も単身赴任生活でしたが、薄いカーテンだったためか冬場は朝日のまぶしさで日の出とともに目が覚める生活で、寝坊したことはほとんどありませんでした。雪かきも年に1、2度しか必要がないため、盛岡など内陸では考えられないほど快適でした。

東日本大震災から3月には丸2年が経ちます。でも被災地の状況はハードだけを見ると大

きく変化はしていません。万里の長城とも呼ばれた宮古市田老の大防潮堤の周辺も、宮古港の魚市場に近い鎌ヶ崎地区も雪の下に家屋のコンクリートの土台がむき出しで見えます。いち早く復活した水産関係の施設を除くと今年の冬に見た景色とほとんど変わりません。長く険しい復興への道のりをあらためて実感して帰ってきました。

「仮設に住み続けたい」

宮古支局は西町という宮古駅から徒歩7、8分の場所にあります。宮古湾からは1キロ以上内陸にあります。その支局の目の前に西公園という桜のきれいな児童公園があります。子供たちや近所の人たちの憩いの場です。震災後は、そこに仮設住宅が建設され、隣接の県有地も含め40世帯が生活するようになりました。取材を通じて顔見知りになり、仮設住宅のみなさんとは本当に仲良くお付き合いをさせていただきました。午後に時間があるときは、談話室にお邪魔しておばあちゃん、おじいちゃんのお茶のみに参加したり、若いお母さんを中心にした飲

みに会に招かれて深夜までお話をしたり、震災後に知り合った新しい仲間として仕事を越えたお付き合いをさせていただきました。転勤直前、仮設住宅の談話室で手料理の送別会を開いていただいたことが忘れられない思い出です。

その送別会にも参加してくれた森さんという70歳代のおばあちゃんの言葉が印象に残っています。その方は仮設住宅に1人暮らし。市内の息子さん夫婦とは震災前から別々に住んでいたそうです。さぞ、仮設住宅でさびしいだろうと思っていたら、そのおばあちゃんは「仮設住宅がある限り、ずっとここに住み続けたいのよ」と仮設の人たちにも私にも言うんですよ。周囲の方々に気を使っているのかとか、家族関係で悩んでいるのかと思ったらそうじゃない。息子や孫たちは頻りに訪ねてきて、体が丈夫ではないそのおばあちゃんを心配している。周囲がうらやましがらるご家族です。でも、家族にも同じように「仮設に住み続ける」と伝えているらしいのです。

どうして住み続けたいのですか？思い切っておばあちゃんに聞いてみました。おばあちゃんはさりとて言うんです。「いつも近くに気心の知れた人がいて、談話室で毎日話ができる。仮設住宅の建物も贅沢さえ言わなきゃ快適よ」。被災前よりも心の交流が多くなった、つまり人間関係が深くなったというんですよ。冬は寒さや結露、夏は暑さ対策が大変で、しかも狭い仮設住宅にどうして住み続けたいのか。私は一つ思い当たることがありました。

実は、宮古市の仮設住宅の入居者選定方法は、陸前高田市や山田町などと少し違っていたんです。多くの被災自治体は、公平性を保つために抽選で入居者を決めていました。ニュースで市長さんがくじを引いている場面を覚えている方も多いと思います。それに対して、宮古市

は細かく62か所の仮設住宅団地を建てて「ソーシャルミックス（多世代居住）」という考え方に基づいて仮設団地ごとに世代間のバランスを図り、できる限り被災前の居住地域に近い仮設住宅を割り当てました。しかも希望に応じて一軒一軒やり取りをしながらあっせんしました。同じ町内会の方や子供ならば同じ学校の子がご近所にいる。これは阪神大震災の時の失敗から得た教訓に基づいた判断です。その時点で長期間になる避難生活を想定していました。

スピード優先かゆっくりでも世代バランスか、どちらが正解か震災直後の混乱期は正しい答えがわかりませんでした。それでも宮古市はかたくなに筋を通そうとしていました。若い担当者が被災者からの苦情に近い相談に苦勞している姿を毎日見ました。当時、市役所の担当課長さんは信念を持って「数年にも及ぶ仮設での生活を考えると丁寧に決めたい。作業が他よりも少々遅れることによる批判は覚悟している」とコメントしてくれました。お役所という市民からのお叱りを恐れて、できるだけかの自治体と同じように横並びに、穏便に作業を進めたがるものです。宮古市役所の腹の座った対応に正直驚きました。「住み続けたい」と願ったおばあちゃんの言葉は、1年以上前の市役所取材の答えだったような気がしました。

## 相馬市長の「社会実験」

昨年10月に出張で訪れた福島県相馬市で、宮古市の仮設住宅の「ソーシャルミックス」という考え方は正反対の方向性ですが、興味深い事例を見つけたのでご紹介したいと思います。相馬市までは福島市からマイクロバスで国道399号を通過して、計画的避難区域となっている飯館村を通過して、南相馬市から太平洋沿岸を

北上しました。住民の9割以上が避難を余儀なくされた飯館村を通過中は「音のない世界」を走っているような感覚に襲われました。沿道の家々や学校など日常の風景に全く人がいない。国道を車両だけが行き交う。よく見ると、昼間なのにすべての家のカーテンが閉じていて、生活感がまるで感じられませんでした。私たち岩手県民も傷ついた被災地を抱えています。原発事故という悲惨な現実を背負い込まされた福島県の人たちを気の毒に思いました。

相馬市では、海外企業（ダウ・ケミカル）が支援して市が建設した通称「井戸端長屋」という災害公営住宅を見学しました。これは高齢者を孤独から守るため、共同生活をしてもらう施設です。各部屋が大きな廊下沿いにあり、中央のホールでコミュニケーションが図れるという触れ込みです。そのコミュニケーションの場が「井戸端」ではなく、コインランドリーのように洗濯機が並んだスペース。10畳ほどの小上がりのような場所に畳が敷いてあって、座って話し込んだりお茶を飲んだりできるそうです。入居物件は主に高齢者ですが、1人暮らしでも老老介護でも、夫婦入居も構わないそうです。被災高齢者が身を寄せ合い安心して暮らせる施設として12世帯収容の1号棟は満室になり、2号棟も入居者を募集中でした。

医師であり、総合病院を経営していた相馬市の立谷市長さんは、とてもユニークな方です。医師つながりということで宮古市の前市長の熊坂さんとも深いつながりがあります。決断のスピードと行動力は2人の共通点でしょう。2人とも全国的に有名な方です。その市長さんに宮古のソーシャルミックスの例を挙げながら、意地悪な質問をしてみました。「どうして高齢者だけ集めるのですか」と。市長さんは予想していたのか高笑いしながら自信に満ちた顔で答え

てくれました。「大いなる社会実験ですよ」。言いたかったのは、おそらくこういうことだと思います。震災復興だけを考えれば、ソーシャルミックスがおそらくベターだろうが、復興後の被災地はどこも超高齢化社会が避けられない。過疎化も一層進むだろう。東北地方の宿命です。その時に身を寄せ合って生活するスタイルがどこまで社会に受け入れられるのか。そんなことを思い描いているようでした。相馬市長の社会実験の行方をこれからも注目したいと思います。

## 被災地に足を運ぶ支援

間もなく震災から2年が経過します。被災地で暮らした者として、実感することは盛岡など内陸地方の記憶の風化です。私自身も盛岡に転勤して4か月目となりますが、日ごと被災地の状況や被災者の方々の気持ちが記憶として風化していくのを実感しています。これではいけないと思うのですが、人間は忘れていく動物です。私がそういう状況ですから、もともと被災地に暮らしていない方々が、少しずつ忘れていくのは仕方ありません。

けれども、関西や首都圏の方々は「もう東北は復興したんでしょう」と思い込んでいる人たちがいます。気が付くと1年くらいで新しいビルが建つ大都会に住んでいる人たちにとって2年間も被災者の新しい家が決まらない現実は理解できないのかもしれませんが。

被災県である岩手に住むものとして、もう一度沿岸の被災地支援に立ち上がらなければいけません。大切なのは被災地を孤立させないこと。同じ県民として震災を風化させない努力です。長期的なスパンで震災復興をとらえ、被災者と一緒に世の中に現状をアピールし続けることで

す。そうしないと、今は国の予算も重点配分されていますが、南海、東南海地震の危険性が指摘される中で、首都圏や西日本の防災対策に手厚く配分されるようになってしまうでしょう。

これから先もっとも必要な支援は、被災地に足を運ぶこと。団体視察や観光のほかボランティアツアーでも個人的な小旅行でもいい。被災地を定期的に訪れてください。沿岸の観光地や宿泊施設、道の駅で買い物でもして「盛岡から来ました」「今年3回目なんですよ」とか地元の方とおしゃべりしてください。被災地だけ孤立させない、「忘れてないよ」という何よりの応援メッセージになるのではないかと思います

います。わが社でも復興支援を目的に被災地を回る買い物バスツアーなどを企画しています。山田町のかき小屋で人気のかき食べ放題とセットもあります。これからが旬ですので、ぜひご活用ください。

10年、いや15年先にある岩手県沿岸の「完全復興」に向けて、みんなで誘い合わせて沿岸に出かけましょう。震災直後からネットワークを生かして有意義な支援活動を展開されたロータリークラブの皆様のますますのご活躍を期待して結びとさせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

**例会報告**

**第25回例会  
平成25年1月18日(金)**

於 川徳 12時30分 開会点鐘

- ・司会 藤村文昭会長
- ・ソング それでこそロータリー
- ・会長報告 藤村文昭会長
- ・ゲスト 小原正明様(岩手日報社事業第2部長)。
- ・皆出席バッチ 鈴木貞雄君(57年)、吉田育弘君(36年)

- ・入会祝 鈴木貞雄、岩野法光、佐藤重昭、千葉隆史君。
- ・誕生祝 鈴木貞雄、岩野法光、川村 登、飯塚 肇君。
- ・幹事報告 佐藤重昭幹事

**【他クラブ例会変更のお知らせ】**

- 盛岡西RC = 2月7日(木)は新年会・年祝会のため18:30~駒龍。
- 盛岡南RC = 1月29日(火)は新年会・年祝会のため18:30~大清水多賀本店。

**【ニコニコBOX】**

- ◆鈴木貞雄君…皆出席57年達成致しました。会員の皆様に感謝いたします。
- ◆阿部勇一君…久しぶりの例会に出席しまして大変緊張致しました。盛岡ロータリーに貢献できるよう努力したいと思いますので、皆さんこれからもよろしくお願ひ申し上げます。

出席報告  会員数 /66 名  出席数 /45 名  出席率 /76%  前々回修正出席率 / 特別休会

**プログラムの  
お知らせ**

- ・1月25日(金) 会員卓話 菊池 尚会員  
「たのしいアフリカ旅行」
- ・2月 1日(金) 会員卓話 古山明廣会員  
「(仮)検査の結果が出るまで」
- 8日(金) 第3回クラブアッセンブリー

- 本号編集担当 / 道脇 清文
- 次号編集担当 / 川村 宗生